

シリーズ

「私の森語り」

もりかた

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介いたします。



「組手でつなげる支援」

東北十熊本十能登



ながさか 工房し
ながさか ひろし
長坂 洋

■自己紹介

製材業の三代目、先代の死去に伴い製材業を廃業。木工業に従事し、壁材の下地として使われる胴縁材を使った製品開発に参加。

同縁材から断面四〇×一五ミリの細い平板を取り、組手を加工して棒状の組立部材とした「組手仕」を始めて十三年。加工機を製作し、自社生産を始めて十年となり、「組手仕おかげまわし東海」の代表を務めています。

■活動内容

組手仕は、いろいろな場所です



災害備蓄用の組手仕（土岐市）

くさん作って広めていただきたいと考え、著作権を放棄しています。令和六年一月、能登半島地震発生後にいち早く（公社）国土緑化推進機構が「緑の募金」復旧支援使途限定募金（地震災害）として、組手仕による避難所等の支援を決め、（公社）石川県木材産業振興協会の古谷理事が現地コーディネーターを担い、宮城県の登米町森林組合の竹中参事からは、東日本大震災の経験を生かした指導・助言をいただきました。

初動は一月十七日でした。岐阜県土岐市からの災害備蓄材の二千本と宮城県の二拠点からの二千本に加え、続けて愛知、滋賀、栃木から組手仕が届きました。また、すぐに金沢市で生産が始まり、四月中旬までに二万本以上の組手仕が届いています。

支援活動には、熊本震災支援のノウハウが生かされています。始めに公共スペース用への下駄箱・整理棚などを被災者と一緒に組み立てて、組手仕の便利さと楽しさを知っていただき、その後個別スペースの小さな整理棚を提供するという流れができました。

奥能登は少子高齢化が進む小さな集落が多く、小規模な公民館などに避難所が開設されています。そのため、公民館の通路に配置できるサイズの下駄箱、収納棚などが重宝されました。テレビ小説のセリフのごとく「何にでもなる魔法の材料」として活躍しています。避難者からは、「辛いことも多いけど、一緒に対話しながらものづくりをして、それが形になるので前向きになれる！」「子どもも

女性も、自分たちで欲しいものを自分たちで考えて作れる。」「ボランティアの方々とも一緒に話しながら作品を作れるので、関係性づくりにも良い！」などの声が聞かれました。



七尾市内



輪島市内

■メッセージ

ネット検索では、あちこちでの組手仕のイベントがヒットします。今後は、能登での事例を携えて、各地へ災害備蓄と協働支援を呼びかけていきます。

■連絡先

愛知県名古屋市長 東区矢田東一ー七
ながさか株式会社内
<https://nagasaka.nagoya/>

